

radical chic

編集 共産主義者同盟首都圏委員会
発行 ウィンドベルファクトリー
連絡先 新宿区西新宿7-3-10
山京ビル503-201

混乱を深める米帝又西体制と権威主義体制に挑む民衆の闘い

韓国非常戒厳

荒唐無稽な陰謀謀略であった。

非常戒厳宣布後、国会封鎖をもく

十二月三日夜、韓国の尹大統領は突如「非常戒厳」を宣言した。軍が国会を包囲、突入、韓国は一時騒然とした。韓国憲法では非常戒厳は「戦時や事変、これに準ずる国家非常事態、兵力により公共の安寧秩序を維持する必要がある時」に発令される

である野党から国を守るためという

となつてはいるが、今がそれに該当する事態だとは到底思えない状況の中の宣言であり、韓国民衆だけではなく世界中の人々が一瞬思考停止になつたのではない。四月の総選挙で与党「国民の力」が大敗し、国会で人事案や予算案を通過させられない事態となり、尹政権は機能不全に陥つたことに加え、妻・金建希の疑惑についても野党からの激しい追及され、尹大統領自身が追い込まれてはいた。だが、行き詰まった政局を突破するために非常戒厳に訴える

るむ軍の介入を市民とともに撥ね退けた与野党の国会議員らが国会に集まり、解除要求決議を採択、尹大統領は四日未明、宣布から約六時間後非常戒厳を解除し、軍を撤収させた。そして全閣僚は韓首相に辞意を伝え、大統領府の要職である室長、首相秘書官らも辞意を表明、戒厳を進言したとされる金国防相は「あらゆる事態の責任をとる」と述べた。

抑えつけようとする権威主義国家の指導者のような乱暴な政治手法である。それに加え、発令の理由として挙げたのが、朝鮮民主主義人民共和国（以下朝鮮）に従う「従北勢力」

戒厳が宣言された約十分後、国会よりも先にソウルから約二十キロ離れた中央選挙管理委員会事務所に侵入するという不可解な軍の行動があった。以前から尹大統領を支持する右派勢力の一部は与党が大敗した四月の総選挙で選挙による不正が行われたと主張していた。

一連の出来事が深夜であったにもかかわらず、国会周辺には、軍に對し果敢に立ち向かう人々の群れが押し寄せ、戒厳撤回のシュプレヒコールを連呼した。

四日、野党六党は「憲法違反」だとして尹大統領の弾劾訴追案を国会に提出した。三日後、尹大統領の弾劾訴追案を採決する本会議が行われ、方針に右往左往してきた与党「国民の力」は弾劾に反対する方針を決定、採択を前に所属議員の大半が議場を退席した。野党全議員では有効票に達しないため、弾劾訴追案は廃案となつた。ソウル市内では各地で集会が行われ、人々は尹大統領の弾劾を求める声を上げ、国会周辺には約二〇〇万人の民衆が集結した。

混乱が続く韓国政治

与党「国民の力」の韓代表は、五日には弾劾訴追案が「可決されないよう努力していく」と述べたものの翌日には一転、「大統領の職務停止が必要」として訴追案に賛成する意向を表明したが、本会議が開催される七日には「最善の方法を議論する」として再び反対に回つた。与党には二〇一六年の朴槿恵大統領が弾劾されることによつて保守勢力が分裂し、政権を失つたという苦い経験がある。

他方、最大野党「共に民主党」の李代表の国民からの不人気ぶりも弾劾反対を後押ししたと見られている。李代表は収賄罪などの複数の罪で起訴され、一審ではすでに有罪判決が出ている。

その後十二日には、尹大統領は国民向けの談話で「弾劾にも捜査にも

堂々と立ち向かうつもりだ」と述べ、早期退陣にも応じない考えを示した。さらに戒厳宣言は憲法の枠内で大統領権限の行使であると正当化した上で、中央選挙管理委員会の捜査が目的だったことを明かした。選管のシステムが朝鮮のハッキングを受けたことによつて不正が起こったことが四月の総選挙で与党が大敗した原因だったと言ふのだ。「共に民主党」の李代表については「有罪判決が迫り、早期の大統領選挙を行おうとしている」、「野党の議会独裁に對抗し、自由民主主義と憲政秩序を守るうとした」と主張し、戒厳宣言は「巨大野党の反国家的な悪事を国民に知らせる」ためであり、内乱罪には当たらないと訴えた。政権支持率は十一%に、与党支持率も二四%に落ち込んだ。

その後韓国の国会は十四日、尹大統領の弾劾訴追案を可決した。尹大統領の職務権限は同日夜に停止され、韓首相が職務を代行することになった。可決直後、尹大統領は「私は決して諦めない」との談話を発表した。本会議直前には弾劾否決を決めていた与党の全議員が投票に参加したが、十二名以上が造反した。大統領弾劾が可決し、与党の支持率も低い中、野党「共に民主党」は大統領選に持ち込みたいところだが、李代表は公職選挙法違反などの

複数の刑事裁判を抱え、有罪が確定すれば被選挙権を失う「司法リスク」があり、国民からの人気もない。韓国政治には出口が見出せない。

韓国議会政治の混乱はさらに進み、韓国国会は二七日、大統領の職務を代行する韓首相に対する弾劾訴追案をも採決した。大統領の罷免の可否を判断する憲法裁判所の裁判官を直ちに任命しなかつたことに、共に民主党が憲法違反だと反発していた。大統領代行が弾劾されるのは韓国の憲政史上初めてのことである。職務が停止された韓首相に代わり、崔経済副首相が大統領権限代行に就いた。

非常戒厳発令の一連の展開の中で特筆せねばならないのは、今回もまた韓国民衆の力だ。戒厳宣言直後には軍の圧力に立ち向かい国会周辺に終結し、弾劾可決に向けて連日デモを展開してきた民衆の底力は健在だ。弾劾が採決された十四日に国会周辺には二百万人の民衆が押し寄せていた。

今回の件を対岸の火と見なせないのは、この国で目論まれている憲法改正の自民党案に含まれる「緊急事態条項」である。有事などで政府に権限を集中させ、言論や出版、集会などの自由を制限する「緊急事態条項」が憲法の中に盛り込まれ、実施されることになれば、韓国と同様な

事態となる。

われわれ日本人も傍観視できない朝鮮半島の固有な歴史——日帝植民地支配とその結果としての南北分断——の蓄積の上に、現在でも財閥が支配する経済体制の中で、革新政権でさえも新自由主義政策に訴えざるを得ないという事情が政治的混乱を増幅させている新自由主義政策で犠牲になるのは民衆であり、民衆の憤激が政権を打倒する。それが繰り返されるのは、終焉に近づく資本主義の下では事態の打開は不可能になっているからだ。

シリア・アサド政権崩壊

その間隙を突き反体制派が急襲し、あっけなく崩壊し、アサド大統領はロシアに亡命した。イランにとつてアサド政権は、レバノンの親イラン民兵組織ヒズボラに武器を供給するための経由地としての役割を果たしていたが、今後これが不可能になる。イランが長年かけて構築してきた反イスラエルのネットワーク「抵抗の枢軸」は危機的な事態に直面することになり、中東の勢力図は一変し、不安定さが支配していくことだろう。

韓国が騒然とする中、中東でも大きな出来事があった。二〇二一年の「アラブの春」では他国——例えば欧米帝国主義の介入で崩壊したりビバのカターフィ政権に比して桁違いの強靱さを示したシリアのアサド政権が崩壊した。父子二代半世紀に渡る独裁体制は幕を閉じた。強靱だったのには理由がある。ロシアとイランが支援し、後ろ盾になってきたからだ。だが、十三年間の欧米による経済制裁と政治腐敗で体制がぜい弱化した上に、政府軍を支援してきたレバノンの親イラン民兵組織ヒズボラがイスラエルとの交戦で、ロシアはウクライナ侵攻とともに疲弊してい

間人への無差別空爆を行い、アサド政権の戦争犯罪に加担し、その責任が今後問われることが予想できる以上、ロシアの思惑通りに中東政策を進めることは困難である。

不安定化が予想される中東情勢

複数勢力が入り乱れるシリアにおいて政権移譲が円滑に行われるかも未知数である。さらにトルコなどの各国の思惑もここに交錯する。今回の攻勢を主導した「シリア解放機構」(HTS)は「イスラム国」(IS)を前身としており、米国や国連、そしてトルコからテロ指定を受ける。この間、北部に勢力圏を持つ反体制派「シリア国民軍」(SNA)は北部マンビジュを制圧した。マンビジュは対立するクルド勢力主体の民兵組織「シリア民主軍」(SDF)が支配していたが、SDFを支援してきたのが、クルド勢力をテロ組織と見なすトルコである。また、SDFはアサド政権と距離をおきながら、米軍と連携しIS掃討を行ってきた。そしてシリア南部は他の反体制派に掌握されている。アサド政権崩壊後各勢力の主導権争いは激化する危険がある。政権移譲が順調に進んだとしても、テロ組織と指定されるHTSが国際社会の承認を得られるかどうかはわからない。

さらにはこの事態を受け、ISが勢いを得ることも懸念されている。アサド政権が崩壊した八日、米軍はシリアでISの拠点多数を空爆した。またアサド政権と敵対したイスラエルは九日、シリアの軍事拠点一五〇カ所以上を空爆し、また混乱に乗じ、イスラエルがシリアから奪った占領地ゴラン高原の非武装地帯を越えてシリア側への進軍を行った。イスラエルのネタニヤフ首相は八日、ゴラン高原を訪れ、アサド政権崩壊は自国の安全を高める「大きなチャンスだ」と歓迎した。米帝の後盾の下、国際世論を無視してパレスチナの抹殺(ジェノサイド)を続けるネタニヤフ政権が狙うのは、占領地の拡大と自国領土の拡大であり、「大イスラエル構想」の完成だ。これを許してはならない。

さらにアサド政権崩壊は世界の勢力図も変化をもたらす契機になり得ると考えられるのは、ロシアの存在だ。米国とISに主導された世界秩序に代わるもう一つの勢力として世界の覇権争いに名乗りを上げたロシアにアサド政権崩壊は痛手を負わせることになった。その一方でロシアはウクライナ戦争を今も続けている。

ウクライナ・ゼレンスキーの方針転換と取り残されるパレスチナ

ウクライナのゼレンスキー大統領は十二月一日、首都キーウで会見し、ロシアが二〇一四年に併合したクリミア半島を含む一部占領地について武力での奪還は困難、とりわけロシアの前進する東部の戦況はきわめて厳しいということで、外交で全領土回復を目指す」と表明した。北大西洋条約機構（NATO）加盟が確約され、ロシアの侵略を抑止する環境を整うことを条件として、一部領土は戦闘終結後に交渉で取り戻すことを容認する方針に転換した。

この方針転換は言うまでもなく、米国内次期政権を見据えてのことだ。選挙戦からウクライナの戦争を直ちに終わらせると繰り返し主張してきたトランプが大統領に正式に就任すれば、これまでのような軍事支援は得られず、戦争続行は不可能であるとゼレンスキーは考えているのだらう。しかしゼレンスキー大統領が厳しい事態に直面すると思われるのは、トランプ次期大統領の政権移行チームは、NATO加盟を棚上げする案が検討していることだ。

この戦争はウクライナのNATO加盟構想にロシアが反対し軍事侵攻したことによって始まったのだから、NATO加盟を条件とすれば停戦合意は困難になると思われるが、

ゼレンスキーの方針転換に対し、ロシアのプーチン大統領は、年末恒例の大規模記者会見で、ウクライナとは停戦に向けた交渉と妥協の用意があると表明した。交渉については、

二〇二二年にトルコでまとまりかけた停戦合意案が基盤となることの従来立場を繰り返した。かりにプーチンの主張が現実のものとなるなら、この戦争とは一体何だったのか？ 大量の兵器が投入、消費され、多くの無垢の民の命が奪われ、生活が破壊されただけだったのか？ 米国内政治の事情によって他の国で戦争が行われたり行われなかつたりするということなのか？

混乱するヨーロッパ政治

政治の混乱はヨーロッパにおいても起きている。フランス国民議会は十二月四日、二〇二五年の社会保障に関する予算案を採決なしに強行

採択したバルニエ首相率いる内閣の不信任案を賛成多数で可決した。発足後わずか三カ月で内閣は総辞職した。フランスで内閣不信任が決まったのは六二年ぶりである。その後バイルが首相に就任したが、今年に入り四人目の首相である。

界中に伝染する。典型的なのは韓国であり、為政者が陰謀史観を抱きながらトランプの手法を模倣する。「自国第一主義」を主張する米国を恐れ、各国も利益確保のために自閉していく。トランプ現象はグローバルバイセクションによって生み落とされ、そこで犠牲になった人々の一つの政治表現である。これまで抑圧され、声を持たなかった大衆の手が公的政壇の舞台にまで達したのである。しかしその政治表現たるや、これまではおよそ語られることが許されない稚拙な妄想とむき出しの敵対心に満ちている。政治とは理性的存在者である「公民」によって行われるはずだとしながら政治を語ってきた左翼を含む知識階層の信念など今の世界政治には通用しない。

他方、ドイツ連邦議会は十二月十六日、シュルツ首相が解散総選挙に向けて要請した信任投票を実施し、反対多数で否決した。シュルツ首相はシュタインマイヤー大統領に議会解散を提案し、議会は解散、二月二十三日に総選挙が実施される。解散総選挙は十九年ぶりである。信任投票は議会を解散し、総選挙を前倒しに実施するための手続きであり、三党連立政権が十一月に崩壊している中、選挙で混乱收拾を図ろうとしたシュルツ首相は生き残り策で失敗した。ドイツは今年で二年連続でマ

でもまた、私的な所有欲を満たすことを求めるということでは、資本主義イデオロギーの一パリエーションでしかない。しかし資本主義に終焉が迫っている以上、人々の願いは叶えられない。いや、少ないパイの争奪戦になつていくからこそ、トランプ現象は生まれたとも言つてよい。だからこそ、資本主義に代わる政治経済体制を目指すなければならないのだ。もちろん、それは共産主義である。

追悼 田中美津さん

女たちにウーマン・リブという生き方を指し示して



初版本『いのちの女たちへ〜とり乱しウーマン・リブ論』田中美津著、1972年、田畑書店

一九七〇年代に沸き起こったウーマン・リブ運動の中心的存在であった田中美津さんが八月に八十一歳で亡くなった。最近の彼女の様子は、彼女の本や映画などから知るだけではあったが、『オニババ化する女たち』（三砂ちづる、二〇〇四年、光文社新書）というトンデモ本への「徹底批判オニババ化する女たち（論座、二〇〇五年）」や、『1968』（小熊英二、二〇〇九年、新曜社）への批判「田中美津」

採択したバルニエ首相率いる内閣の不信任案を賛成多数で可決した。発足後わずか三カ月で内閣は総辞職した。フランスで内閣不信任が決まったのは六二年ぶりである。その後バイルが首相に就任したが、今年に入り四人目の首相である。

世界各國の政治は混乱に直面している。これを加速化させているのがトランプ現象である。米国で起こっている現象が他の国でも起こり、世

（次頁へ続く）

（幾瀬二弘）

【前頁から続き】

『1968』を嘆う、くもう悲しくなるほど無知である（週刊金曜日）など、その時々確かな視点に彼女のウーマン・リブ魂の健在なことを確認してきたものである。

ウーマン・リブは一九六〇年代終わりからのベトナム反戦運動、日米安保改定、沖縄返還問題と熱い政治の季節の渦中から生まれた。日本中で学生は全共闘運動や高校生運動を起し、労働者は反戦青年委員会運動、それらに属さない人びとも「ベ平連」を始め様々な市民運動のグループを全国に作っていた。田中美津さんはこうした運動に参加しそこで出会った女性達と新宿リブセンターという拠点を作っていく。筆者は、七〇年前後に清水谷公園での夜の集会でマイクを握る美津さんを見たことを覚えている。

今回改めて彼女の代表作『いのちの女たちへ』と乱しウーマン・リブ論』を何十年ぶりで読み返してみた。美津さんと筆者はほぼ同時代を経験している。彼女の語る当時の状況は、経験の内容は違ってもかなり細かいディテールまでも思い浮かぶように読み進んだ。

「そうそう、そんな空気が漂っていた！」一種熱に浮かされたように、「自分は何をすればいいの？何がしたいの？何か行動しなければいけない！」とあちらこちらをさまよい歩くような。彼女もジュツパチ・シヨック組（一九六七年一月八日羽田佐藤訪ベトナム阻止闘争で山崎君死亡）だったのか。ベトナムの子供たちの救援活動をしてたのか。私は一人でお茶の水にあつたべ平連事務所を訪ねたりしていたなあ。

を弾劾するだけではなくて、その社会を受容し、それに揺さぶられ同調していく自分たち女にも鋭く分析の目を向ける。侵略戦争に銃後の母として息子たちを戦争に送り出してからまだ二〇年しか経っていないのに、もう「平和と民主主義」に浮かれていく日本社会や母達への戦争責任と今この時の「ベトナムとオキナワ」を問いかける視点。だからこの本は、「ウーマンリブって男糾弾でしょ？」と浅薄に揶揄する世間に対して、決然とラディカルに闘いを挑んでいく。

「自分の納得する人生を歩んで行く！」とエールを送る。そして男に対しては「男は女に何を求めているのか？」という根源的な問いを発し「メスを求めているのであれば私たち女は便所ではない！」と言いつ切る。この鋭い言葉に全ての怒りを込めている。サイはこうして投げられた。男たちがどう受け止めるかはそっちの問題である。

争もあつた（勿論これは沖縄での「反復帰還運動」や沖縄国会での沖縄青年同盟の決起・告発に対してどういう立場をとるのかを迫られての事であつたことは言うまでもない）。しかし総じて当時新左翼が差別に対しての認識に欠けていた事は明白であつた。

この本の中で彼女は自らをマナイタの上に乗せ、経験したあれこれから思い至つたことを論理化し、コトバ化しようと格闘していく。自らが幼少期に受けた性被害からくる自意識の葛藤（トラウマという言葉も発見されていない時代の中で）や、社会や家長制家族が女に強いてきた女の生き方や抑圧や差別、連鎖と続いてきた祖母―母―私たちが感じてきた痛みや母性神話、子殺しの女の事件から考える社会から追いつめられる女の問題。どれもが、いつどの女に降りかかってもおかしくないという連帯感や女たちへの限らない愛。「あなたは私であり私はあなただ」という体の芯で捉える女としての痛みやくやしき。そして、社会の女性差別

勿論、男／女の問題に焦点はあてている。女自身が「女らしきや、女のくせに、女に学問はいらない」と育てられ差別を内在化させて生きている。その究極は夫を「主人」と呼ぶ文化すら未だ健在である。いま在る自分の中に大きな矛盾を抱えている事をしつかりと受け止める。そのことから目をそらさずに、しかしそこからどのように生きていくかが大切なのだ。彼女は「この矛盾する自分という問題を『とらえ直し』という言葉で表現している。そして『とらえ直し』でも、開き直りながらも、自分自身のやり方で「おかしい事はおかしい」と立ち上がり、生き難さを生み出している社会を変えよう！」

いのちと直結している女はいつ孕むかの瀬戸際でSEXしている。おちおちしていられないのである。この事を巡る男との落差は未だ大きく在る。今でこそ避妊への非協力やパートナーからの性強要はDVと認定されているが、男たちはこの問題をどこまで理解しているだろうか？ひとたび妊娠したら自分の人生もそれによつて大きく変わらざるを得ないのである。

《沖繩差別、在日差別、部落差別、障がい者差別》。女性差別を考える中でこうした問題を同時に考えようとしている。「女にはなれないが、女の事を考えることはできる」この〇〇にいろんな言葉をあてはめて考えることは出来るでしょ！と。さしずめ、現任なら「ウチナンチュウーにはなれないけれど沖繩のことを考えることはできる。考えもしない事は差別に加担している事と同じ。」

もう一つ彼女は日本社会の中にある幾重にも重層化している差別―被差別、加害―被害、抑圧―被抑圧という構造にも踏み込んでいける。当時、新左翼諸派は「七・七華青闘告発（一九七〇年日比谷野音集会での退場告発）」の洗礼を受け、また、沖縄返還問題での「自立・解放論」vs「奪還論」の激しい論

社会の中で足元深くに埋め込まれ見えなくされている差別の問題と女性差別が決して無関係ではなく、それらをすべてひっくり返す事が女の解放であり革命なんだ！と提示している。そして「ここにいてる女からの出発、ありのままの自分からの出発を呼びかける。へわかつてもらおうと思っは乞食の心へまず己をつっぱね、男をつっぱね、世界をつっぱね、さてそこから己を女を男を世界を捉え返そう、

社会の中で足元深くに埋め込まれ見えなくされている差別の問題と女性差別が決して無関係ではなく、それらをすべてひっくり返す事が女の解放であり革命なんだ！と提示している。そして「ここにいてる女からの出発、ありのままの自分からの出発を呼びかける。へわかつてもらおうと思っは乞食の心へまず己をつっぱね、男をつっぱね、世界をつっぱね、さてそこから己を女を男を世界を捉え返そう、

社会の中で足元深くに埋め込まれ見えなくされている差別の問題と女性差別が決して無関係ではなく、それらをすべてひっくり返す事が女の解放であり革命なんだ！と提示している。そして「ここにいてる女からの出発、ありのままの自分からの出発を呼びかける。へわかつてもらおうと思っは乞食の心へまず己をつっぱね、男をつっぱね、世界をつっぱね、さてそこから己を女を男を世界を捉え返そう、

出会って「いこう〜」のちの賛歌、女への賛歌、人間への賛歌。そして、女こそがこの社会と世界を変える大きな力になっていくという決意表明である。

二〇〇〇年沖繩サミットに合わせて取り組まれた嘉手納基地人間の鎖行動（二万七千人の参加で鎖は大成功！）の夜、那覇の松山辺りの寿司屋で友人のついでで女三人が美津さんに会った。当時美津さんは月の何日かを那覇に借りている部屋に来ていた。人間の鎖の話や美津さんがはまっている島唄談義で盛り上がり、渋い喉を披露して下さった。

私たちは、あなたの力強い言葉に大いに励まされ、とり乱しながらもこの五〇年を生きてきた。あなたから私たちが受け取ったメッセージは一人ひとりの中で自らへの問いかけとなり、生き方となっていた。女性差別との闘いは《個人的な決意》を要求される場面に満ち溢れている。婚姻制度―戸籍制度に対して疑問を持ち入籍せずに子を産んだ女たちがたくさん出現した。婚外子差別と闘うグループも生まれた。職場での差別に対しては賃金差別や扶養手当差別の闘いが取り組まれた。母子家庭を

取り巻く困難に対しての運動体もある。セクハラや性暴力、DVに悩む女性に対しては全国で駆け込み寺が作られていった。

あなたは少し前に「ウーマン・

リップはMe Too運動だったのね」という言葉を残された。そうかもしれない。つい先日米検察官の女性が検事正からの性暴力を告訴した裁判が報じられた。彼女の手が憤りと悔しさに震えるのをテレビが映し出しているのを見ながら、鯛は頭から腐るというけれど、この国は行くところまで行ってしまっていると感じた。彼女は「私のような思いをする女性がこれ以上出ないように」と決意したと語っていた。個人に起こったことは決して個人的ではない、社会が生み出している。沖繩での性暴力も酷いことに繰り返し起っている。ウーマン・リップの問題提起は半世紀を経て色褪せず女たちにせまっている。「この星は私の星じゃない」とつぶやかれた美津さんが、世界中でわき起こる戦争に怒り、差別に怒り、政治に怒りながらこの世を去られたであろうことは想像に難くない。

私たちの闘いはまだまだ続く。美津さん、どうかどこかの星から女たちにエールを送って下さい！私もうしぼらく…。（篠原 憐）

【辺野古だより】

県民大会に二五〇〇人参加！新たな「うねり」となりうるか

一月二十二日（日）、沖繩市民会館大ホールを主会場に二五〇〇人超。サテライト会場である名護市内に八十八人、宮古島に四十人、石垣島に五十人が結集し《米兵による少女暴行事件に対する抗議と再発防止を求めめる県民大会》が開かれた。

この大会は、県女性団体連絡協議会（女団協）など女性団体を中心とした実行委員会が主催した。賛同団体は女団協を構成する二十一団体を含め計百四十八団体に上った。

主催者を代表して女団協の伊良波純子会長は「戦後八〇年が経つ今も、沖繩では悲惨で非道な事件が起きている。今回の事件でも、日米両政府からの謝罪はいまだにない」と批判。「子どもたちに安心、安全な日常を約束するため二度と同じ事件を起こさせないことを日米両政府

に求めている」と訴えた。実行委員会共同代表の高良沙哉沖繩大学教授は、米軍による犯罪の背景には「特権的地位を与えている日米地位協定がある」と指摘し、「これ以上、沖繩に生きる人びとを軍事性暴力の危険の犠牲にしてはいけない」と訴えた。

大学生の崎浜空音さんは「私は基地のある街、北谷町で生まれた。大学で上京した時、自分がいた環境はどれほど人権が侵害され続けているかを痛感した」とし、「どうして、沖繩に生まれよう！」と訴えた。

県民大会は最後に大会決議を採択し、熱気あふれる中、終了した。実行委員会は翌一月二十三日（月）、外務省沖繩事務所と沖繩防衛局を訪れ、大会決議の実現を求めた。来年二月には東京でも政府・関係省庁への要請行動

が予定されている。今回の実行委員会は、過去に開かれた米兵の暴力事件に抗議する県民大会と趣が違っていた。大会を提案した女団協も当初は県議会が主導する超党派による実行委員会の立ち上げを模索したが、自民党、公明党、維新の会が難色を示したことで、女団協がけん引して実行委員会をつくり、新たな形で開いた県民大会。この県民大会が転換点となり、新たなうねりとなりうるのか、今後の運動展開を期待したい。（阿部貴之）

米兵性暴力許さない

12月23日

県民大会 2500



【映画評】

『サウンド・オブ・フリーダム』

『児童誘拐・人身売買・性虐待と闘う捜査官を描く』

2023年アメリカ合衆国 監督アレハンドロ・モンテベルデ

元米国土安全保障省の捜査官ティム・バラードの実話に基づく映画だという。二〇一八年に完成し、米国で公開されたのが二〇二三年。

児童の誘拐、人身売買、性的虐待を行う国際犯罪組織に拉致された子どもたちの行方を追ひ、救出を図る物語。ストーリー自体はフィクションがだいぶ入っているようだが、映画冒頭には、実際の防犯カメラの映像とされるものが映し出される。それを含め内容がほぼ現実になっていることのように描写され恐怖と怒りを喚起させる。

中米の小国・ホンジュラスで実直な父親と平和に暮らしていた音楽好きな少女ロシオと弟ミゲルという父子家庭の3人の家を、ロシオが駅前で歌っているのを見たという美しい女性が訪ねてくる。ロシオにはタレントとしての才能があると言う女を信じた父親とロシオは、オーディションへの参加を承諾する。ミゲルも「可愛いから」とオーディション

と一緒に来るよう誘われる。しかし、オーディションと称して集められた会場から、大勢の子どもたちと共に車に乗せられたロシオとミゲルは、見知らぬ港に連れ去られてしまう。子どもたちは港でコンテナに閉じ込められ、貨物同然に海を渡り、南米コロンビアへ。そこで、子どもたちはバラバラに小児性愛者たちに売られていく。

ロシオとミゲルの姉弟も別々に売られ、買った大人たちの欲望によつて身も心も踏みにじられていく。小児性愛者を追っていた米捜査官のティムは、上司から特別に国外での捜査許可を得て、児童人身売買がはびこる南米・コロンビアに単身乗り込むと、元犯罪者や資金提供を申し出た資産家、地元警察と組んでおとり作戦を計画する。ミゲルを誘拐した小児性愛者に近づき、幼い男の子を買うことを持ち掛けてなんとか弟のミゲルの救出に成功したティムは、さらに子どもたちの命を救

うために命懸けの作戦に臨む。自ら小児性愛者であると称する富豪を演じ、多くの子どもを買うことを前提に、大規模なパーティーを開くことを犯罪組織に持ちかけるティム。豪邸のある島に子どもたちを連れ来た犯罪者をおびき出し、危険な駆け引きを行いながら、地元警察と協力し、十数人の子どもたちを助け出す。しかし、そこにロシオの姿はなかった。売

春宿に売られたロシオは、そこからさらに小児性愛者をボストする、反政府の武装集団に売られていたのだ。政府も警察の力も及ばない武装集団の支配地域に船で単身乗り込んだティムは、ボスの寝室に危険を冒して忍び込み、ボスを殺害してロシオを確保し、逃走することを試みる。

場面としてはよくあるアクションシーンであり、緊張感をほらみながらも、直接性被害や性暴力に及ぶシーンは少ない。そんな悲惨な映像は見たくないという方もご安心を。ただし、小児性愛者が子どもたちの写ったアルバムを見ながら買春する幼い子を選ぶ場面には吐き気を覚えた。

映画の最後に、姉弟は救い出され、父親と再会するが、映画の中でも述べられているように、救い出されるのは被害者うち、ほんの

一握りであり、多くの子どもたちは行方不明のまま。助け出された子どもも、大きなトラウマを抱えて育つことになる。毎晩売春させられる子どもたちの姿も映し出されるが、ほとんど大人に見える子ども一人は、まだ中高生くらいのティーンエイジャーだという。非常に悲しい映画だ。

エンドロールでは、主演のジム・ガヴィーゼルからのメッセージと共に寄付を募っていて、それが作品の内容により現実味を持たせている。原因に直接の言及はないが、様々な影響で、完成後5年間公開できなかったこと、このストーリーを多くの人々に届けなければならぬこと、現実から目を背けてはならないことなど。(純粋に映画の完成度という点からは、このメッセージは、余計なものに感じる場面ではある。)

製作総指揮には、「パッション」、「マッドマックス」など、多くの映画に出演し、超保守派のカトリック信者としても知られ、映画界では珍しくトランプ支持者である俳優のメル・ギブソンが名を連ねている。もちろん児童人身売買反対と、彼の信仰には何の矛盾もない。ただし、

彼は恋人へのDV疑惑で警察の捜査を受け、一時映画界を干された過去もあるから、彼の名に抵抗を覚える向きも多いだろう。監督はメキシコ出身のアレハンドロ・モンテベルデ。

世界では、年間数十万人の子どもたちが行方不明になり、判明しているだけでもそのうち数万人が、児童誘拐、児童人身売買の被害にあっているという。日本でも行方不明の子ども(※九歳以下、(警察庁、二〇二三年報告)編集者註)の数は年間千人を超える。ジャーニーズの性加害・被害問題の発覚もついでこの間のことだ。新宿「トヨコ」で「パパ活」と称する売春をする少女たちの背景に、貧困や薬物、DV被害などの影もちらつく。そうした現実を踏まえれば、制作者・出演者が誰であれ、見るべき映画と言える。(あんづら)

【現代奴隷制の世界推計】(ILO、二〇二二年)によると三三〇万人の子どもが強制労働のうち過半数は商業的な性的搾取。また、ILO報告書二〇二四年三月「利益と貧困：強制労働の経済」によると強制労働による違法利益は、年間三三六〇億ドルに増加。商業的な性的搾取の被害者は27%、金額では73%。※編集者補註】